

高崎市文化財調査報告書第198集

上並榎八反田遺跡

－医療施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2005

高崎市教育委員会

例 言

1. 本書は医療施設建設に伴い実施された、「上並榎八反田遺跡」(高崎市調査番号385)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在地は、群馬県高崎市内並榎町字八反田187番地他である。
3. 発掘調査は、平成16年12月13日から平成17年1月6日まで実施した。
4. 発掘調査及び整理作業は、医療法人真木会に委託された株式会社シン技術コンサルが、高崎市教育委員会の指導・助言及び監督のもと実施した。
5. 調査体制は以下のとおりである。

高崎市教育委員会
文化財保護課

株式会社シン技術コンサル
調査担当 菊池康一郎
計測担当 成田典信
事務担当 平田貴正

6. 本書の編集は、菊池が行った。執筆はⅠを斎藤寛方(高崎市教育委員会)、Ⅵを株式会社古環境研究所、他を菊池が行った。
7. 本遺跡の自然科学分析については、株式会社古環境研究所に依頼した。
8. 本調査における図面・写真・遺物などの資料は、高崎市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成に従事した作業員は、以下の通りである。(敬称略・五十音順)
阿久沢和子、浅野芳子、阿部善充、浦野千代子、金子孝五郎、工藤さきよ、木暮シズイ、
小見せい子、斎藤文子、佐藤茂夫、須郷 大、島田 稔、高林 操、中村一男、馬場 優、
春山米子、堀込 都、宮原秀夫、森 雄、山田千鶴子
10. 発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して、謝意を表します。(敬称略・順不同)
株式会社トラスト技研、加藤空堀、井上リース株式会社、リネア、たつみ写真スタジオ、
株式会社測研、細谷印刷株式会社

凡 例

1. 本書掲載の第1図は国土地理院発行1/25,000地形図『前橋』・『高崎』・『榛名山』・『富岡』を、第3図は高崎市発行1/2,500都市計画図を、それぞれ使用した。
2. 本書における遺構種類の略号は、SL=水田、SJ=畦畔、Pit=ピット、SD=溝である。
3. 遺構平面図に示した方位は、座標北である。
4. 土層の色調は、『標準土色帖』(農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所色票監修2002版)による。
5. 本書における火山噴出物の表記は、略号を用いた。
浅間C軽石=As-C、榛名・設川テフラ=Hr-FA、榛名・伊香保テフラ=Hr-FP、浅間B軽石=As-B、
浅間A軽石=As-Aである。
6. 全体図の座標については、世界測地系を使用した。

目 次

例 言

凡 例

I. 調査に至る経緯	1
II. 調査の方法と経過	1
III. 遺跡の立地と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
IV. 基本層序	5
V. 検出された遺構と遺物	6
1. 水田跡	6
2. ビット	9
3. 近世遺構	9
4. 出土遺物	10
VI. 自然科学分析	12
1. 上並榎八反田遺跡の土層とテフラ	12
2. 上並榎八反田遺跡におけるプラント・オパール分析	16
VII. まとめ	19
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	3	第6図 畦畔 平・断面図	10
第2図 基本層序柱状図	5	第7図 畦畔・水口・ビット 平・断面図	11
第3図 調査区位置図	6	第8図 調査区北東部の土層柱状図	15
第4図 遺構配置図・土層断面図	7	第9図 上並榎八反田遺跡、調査区北東部における プラント・オパール分析結果	18
第5図 水田模式図	9		

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	4	第2表 テフラ検出分析結果	14
第3表 上並榎八反田遺跡における プラント・オパール分析結果	18		

写真図版目次

PL.1 調査区遠景、調査区全景
PL.2 調査区東側、調査区西側
PL.3 SJ1、SJ1水口、SJ1土層断面、SJ3、SD1、SJ4、SJ4検出状況、SJ4土層断面
PL.4 SJ4～7、SJ6、SJ6水口(北)、SJ6水口(南)、SJ4～7、SJ7人足跡付近、SJ8、基本土層断面
PL.5 Pit1、Pit2、Pit3、杭跡、馬跡、作業風景
PL.6 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

I.調査に至る経緯

本調査は、高崎市上並根町字八反田187番地他における医療施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

平成16年8月、医療法人真木会(以下事業者)から高崎市教育委員会(以下市教委)に医療施設建設予定地の埋蔵文化財の状況についての照会があった。市教委は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地内にあり、工事前に文化財保護法第57条の2第1項の規定による届出が必要であることを事業者に伝えた。

平成16年9月26日、市教委は工事予定地の埋蔵文化財確認調査を実施し、西暦1108年の浅間山噴出火山灰(As-B)に覆われた水田跡を確認した。

平成16年11月4日付けで、事業者から群馬県教育委員会(以下県教委)へ文化財保護法第57条の2第1項の規定による届出が提出された。市教委は当該施設の建築により埋蔵文化財の破壊が確実な旨を県教委へ進達し、平成16年11月15日付けで県教委は事業者へ工事前に発掘調査を実施するよう指示を出した。

発掘調査は市教委の指導・助言及び監督のもと、事業者が株式会社シン技術コンサル前橋支店(以下発掘者)に委託して実施することとなり、平成16年12月2日に市教委、事業者及び発掘者の3者で埋蔵文化財の取り扱いに関する協定を締結した。

II.調査の方法と経過

今回の調査は、工事予定地1,085㎡を調査対象とした。

調査にあたってまず、バックホウによって表土からAs-B上面まで掘削した。次にジョレンと移植ゴテを使用し、人力でAs-Bを除去し、遺構を検出して計測・写真撮影などを行った。

作図作業は、トータルステーションを用いた器械測量と写真測量を併用した。写真記録は35mmモノクロネガ・同カラーリバーサルの2種類を使用し、ラジコンヘリコプターによる空中撮影も実施した。

調査の経過は、以下に掲げる。

平成16年

12月9日 機材搬入。

12月13～18日 調査開始。バックホウによる表土掘削、人力によるAs-B除去。

12月20～22日 手作業による遺構検出、遺構調査。

12月24日 全体清掃後、空中撮影。

12月25日 上壊サンプル採取、及びサンプル採取地点計測。平・断面図計測。

12月27・28日 埋め戻し。

平成17年

1月5・6日 埋め戻し。機材搬出。調査終了。

Ⅲ.遺跡の立地と環境

1.地理的環境

高崎市は榛名山、妙義山をはじめとする群馬県西部の山々を背後に、関東平野の北西奥部に位置する。市内には浅間隠山・鼻曲山を水源とする烏川が、碓氷川・鏡川・井野川などの支流を集めながら北西より南東方向へ流れ、玉村町・伊勢崎市域で利根川と合流する。高崎市の地形をみると、烏川右岸には八幡台地・観音山丘陵、左岸には相馬ヶ原扇状地末端の沖積地、その南方に前橋台地が広がっている。そして碓氷川・烏川・井野川流域には、河川の浸食によって、小規模な低地と微高地が入り組んだ地形が形成されている。

本遺跡の所在する上並榎町は前橋台地北西部にあたり、扇状地から台地へと移行する地点でもある。遺跡は下小島町付近と烏川左岸の微高地に挟まれた後背湿地に位置し、南西へ約0.8kmには烏川、北東へ約2.0kmには井野川が流れている。周辺では、後背湿地を中心に水田跡が多く調査されており、As・C・Hr・FA・Hr・FP・As・Bの各テフラに覆われた水田跡が確認されている。また微高地上では、古墳や集落跡が調査されている。

2.歴史的環境

本遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は確認されておらず、雨壺遺跡(42)と融通寺遺跡(44)で遺物が出土・採集されているのみである。

縄文時代、特に中期後半になると飛躍的に遺跡数が増加する。遺跡は観音山丘陵・八幡台地に多く分布し、前橋台地や微高地にも散在する。

弥生時代は、染谷川・井野川水系と、烏川と井野川に挟まれた地域に集落の突出した分布が認められる。生産遺構としては、井野川と烏川に挟まれた地域に形成された低地に位置する、並榎北遺跡(7)・並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡(11)において水田跡が検出されている。これらの遺跡で検出された水田跡は、As・C下水田跡よりも下の洪水層に被覆されているものもあり、弥生時代中期末から後期前半の水田跡であると考えられている。

古墳時代に入ると更に遺跡数が増加する。集落は弥生時代と同様の分布状況をみせており、本遺跡周辺でも筑縄遺跡群(2)や上並榎屋敷前遺跡(14)のような微高地上で集落跡が確認されている。生産遺構も弥生時代と同様、低地を中心に分布しており、各地でAs・C・Hr・FA・Hr・FPに被覆された水田跡が調査されている。Hr・FA・Hr・FP下水田跡では、「ミニ水田」または「小区画水田」と呼ばれる水田跡が確認されており、御市呂遺跡(36)では、約2mもの厚さで堆積したHr・FAまたはHr・FP降下による洪水層に被覆された小区画水田跡が良好な状態で検出された。

本遺跡周辺の古墳としては、5世紀後半築造とされる上並榎稲荷山古墳(4)が最も古い古墳として知られる。この古墳は舟形石棺を埋葬主体としていること、周辺に系譜が求められる古墳がなく、この時期に新たに築造され始めた古墳であるということから、高崎市八幡町の平塚古墳や群馬郡群馬町の保渡山古墳群と共通性があることが指摘されている¹⁰⁾。他にも筑縄遺跡群(2)で検出された6世紀築造の小量山古墳などのように、現在は消滅してしまった古墳が、周辺の微高地上に多く存在していたと思われる。古墳時代の周溝墓としては、浜尻旭貝戸遺跡(56)や筑縄遺跡群で検出された古墳時代前期の方形周溝墓や、熊野堂遺跡(41)で検出された前方後方形周溝墓などが挙げられる。浜尻旭貝戸遺跡



第1図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な時代	主な遺構	参考文献
1	上並根八反田遺跡	平安	B下木田	本書
2	焼締遺跡群	古墳・平安	小泉山古墳, 住居, B下木田	市教委50集(1985)
3	並根城	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3中世(1996)
4	上並根橋山古墳	古墳	前方後円墳, 舟形石壇	調査会46集(1995)
5	上並根御料所Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳・平安	住居, C下・FA下・FF下・B下木田	市教委108集(1990), 調査会65集(1997)
6	上並根下松Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳・平安	住居, C下・FA下・B下木田	市教委110集(1991), 124集(1993)
7	並根北遺跡	弥生・古墳・平安	C下・FA下・B下木田	市教委84集(1988)
8	並根町Ⅰ遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	調査会83集(2002)
9	飯塚新田Ⅱ・Ⅲ遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	市教委69集(1997), 市教委170集(2000)
10	飯塚新田西側遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	市教委132集(1994)
11	並根北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡	弥生・古墳・平安	C下・FA下・B下木田	市教委144集(1996)
12	並根仲通遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	市教委112集(1991)
13	上並根南遺跡	弥生～中世	住居, 城跡	群文23集(1985)
14	上並根敷前遺跡	弥生・古墳	住居	調査会20集(1992)
15	山遺跡	弥生	包蔵地	県台帳(1972)
16	大八木富士廻り遺跡	弥生～古墳	住居, FA下木田	市教委78集(1987)
17	岡原町西遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	市教委112集(1991)
18	上飯塚城	中世	城跡	新編「高崎市史」資料編3中世(1996)
19	飯塚原田Ⅱ遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	市教委186集(2003)
20	飯塚大道東遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田	調査会64集(1996)
21	飯塚白金井遺跡	平安	B下木田	調査会34集(1994)
22	飯塚東金井Ⅰ・Ⅱ遺跡	平安	B下木田	市教委124集(1993), 調査会31集(1993)
23	並根台原遺跡	古墳	住居	市教委112集(1991)
24	住町Ⅰ遺跡	平安	B下木田	市教委120集(1992)
25	昭和町Ⅰ遺跡	平安	B下木田	調査会19集(1992)
26	高松第1駐車場遺跡	平安	B下木田, 高松城内大型家屋	市教委93集(1989)
27	高崎城遺跡	弥生～近世	住居, 溝, 方形周溝墓, 堀	調査会9集(1986), 市教委81集(1987)他
28	飯塚Ⅰ・Ⅱ遺跡	平安	B下木田	市教委90集(1998)
29	飯塚大高代遺跡	平安	B下木田	調査会67集(1997)
30	川内天神遺跡	古墳	住居	市教委120集(1992)
31	飯玉Ⅰ・Ⅱ遺跡	平安	B下木田	市教委161集(1999)
32	飯町Ⅱ遺跡	古墳	円墳	市教委142集(1996)
33	東町Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡	平安・近世	B下・A下木田	市教委120, 130, 138, 146集(1992～1996)
34	栄町Ⅰ遺跡	平安・近世	B下・A下木田	調査会43集(1996)
35	上小境橋山古墳	古墳	円墳	県台帳(1972)
36	舞布呂遺跡	古墳～中世	住居, C下・FA下・FF下木田	市教委18集(1980), 群文234集(1998)
37	芦田貝戸Ⅰ遺跡	古墳・平安	住居, C下・FA下・FF下・B下木田	市教委134集(1994)
38	芦田貝戸Ⅱ遺跡	古墳・平安	C下・B下木田	市教委9集(1979), 群文234集(1998)
39	芦田貝戸Ⅲ遺跡	古墳	住居, C下・FA下・B下木田	市教委19集(1980)
40	大八木熊野Ⅰ・Ⅱ遺跡	弥生～奈良	住居, 溝	調査会10・37集(1986・1995)
41	熊野堂遺跡	縄文～平安	住居, 方形周溝墓, C下・FA下・B下木田	群文100集(1991)
42	西並遺跡	縄文・弥生・平安	住居, B下木田	群文23集(1984)
43	大八木最盛遺跡	古墳～平安	住居, FA下・FF下木田	群文198集(1995)
44	飯通寺遺跡	弥生～古墳・中世	B下木田, 樹立柱建物	群文118集(1991)
45	下小島町Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳・平安	FA下・B下木田, 大型水路	市教委109集(1990), 調査会49集(1996)
46	下小島遺跡	古墳～平安	住居, 樹立柱建物	群文119集(1991)
47	大八木水田遺跡	平安	B下木田	市教委12集(1979)
48	大八木稲田池Ⅰ・Ⅱ遺跡	縄文・弥生・平安	住居, 溝	市教委44・45集(1983・1984)
49	大八木志志貝戸遺跡	縄文～近世	住居, B下木田, 祭祀遺構, 厨膳	群文295集(2002)他
50	正観寺遺跡群(Ⅰ)	弥生～平安	住居	市教委11集(1979)
51	小八木池部遺跡	古墳・平安	住居, FA下木田	市教委112集(1991)
52	小八木Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳・平安・中世	住居, C下・B下木田	市教委8, 15集(1979, 1980)
53	小八木苗貝戸遺跡	平安	B下木田	市教委25集(1981)
54	飯沢遺跡群	弥生～古墳	住居, 溝	群文26集(1981), 調査会84集(2002)
55	飯沢天王山遺跡	古墳	前方後円墳	県台帳(1972), F・毛古墳経覧(1938)
56	飯沢堀貝戸遺跡	弥生～中世	住居, 方形周溝墓	調査会84集(2002)

※参考文献における略称
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書…群文
 高崎市教育委員会発掘調査報告書…市教委
 高崎市遺跡調査会発掘調査報告書…調査会
 群馬県遺跡台帳西毛編…県台帳

の方形周溝溝は、周溝の底面近くにAs-Cの純層が堆積していたことから、古墳時代初頭に属するとみられている。

奈良・平安時代になると新たな動きがみられ、弥生時代から継続して営まれ続けた熊野堂遺跡のような集落と、大八木屋敷遺跡(43)・融通寺遺跡などに見られる7世紀後半頃から新しく形成された集落の2種類が認められる。大八木屋敷遺跡では、堀と溝に区画された8世紀後半から9世紀前半にかけての掘立柱建物が検出され、古代群馬郡の官衙の一つである「八木院」である可能性が指摘されている^(註1)。

生産遺構としては、As-Bに被覆された水田跡が数多く調査されている。検出された遺構には条里制地割りの確認できるものが多く、本遺跡の約1.5km東に位置する大八木水田遺跡(47)では大規模な「条田制水田」が確認されている。

(註1)徳江秀夫1999「上並榎菟荷山古墳」『新編高崎市史 資料編1 原始古代1』 高崎市史編さん委員会

(註2)高島英之1996「古代の官衙遺構」『大八木屋敷遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

IV.基本層序

I 層 現代盛土層。

II 層 褐灰色土(10YR4/1) しまり強、粘性弱。As-A少量含む。現代水田層。

III 層 橙色土(7.5YR6/6) しまり強、粘性弱。As-A混土。近世地表面。

IV 層 褐灰色土(10YR6/1) しまりあり、粘性やや弱。As-A微量含む。

下層が酸化している。

V 層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりあり、粘性やや弱。

As-A微量含む。下層が酸化している。

VI 層 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや強、粘性弱。As-B混土。

VIIa層 As-Kk純層。黒褐色(7.5YR2/2)を呈する。

VIIb層 As-Kk純層。灰褐色(5YR4/2)を呈する。

VII層上面の足跡状の窪みに、部分的に堆積している。

VIII層 As-B純層。灰褐色(10YR6/2)を呈する。

IX 層 黒褐色土(10YR3/1) しまり弱、粘性やや強。

Hr-FP少量含む。

X 層 黄灰色土(2.5Y5/1) しまり弱、粘性強。シルト質。

XI 層 淡赤橙色土(2.5YR7/4) しまりあり、粘性あり。

シルト質。Hr-FP泥流層。

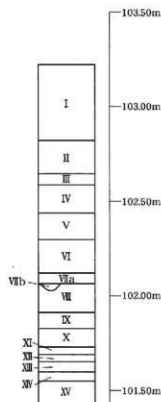
XII 層 淡黄色土(2.5Y8/3) しまりやや強、粘性弱。

上層に黒褐色土層あり。Hr-FA泥流層。

XIII層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性強。

XIV層 黒褐色土(10YR3/1) As-C軽石を大量に含む。

XV層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性強。



第2図 基本層序柱状図

V. 検出された遺構と遺物

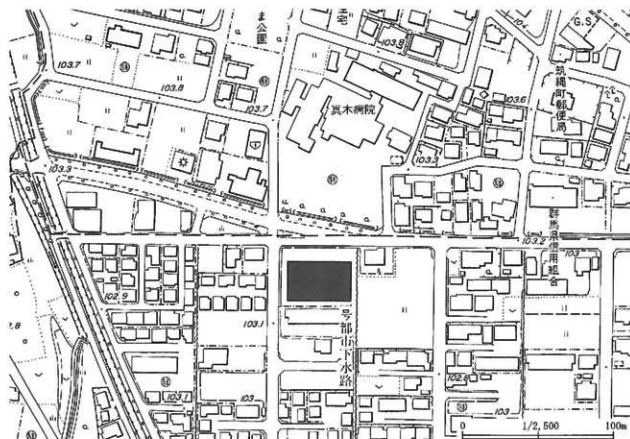
検出された遺構は、As B下水田跡1面、ピット3基、溝4条であった。

1. 水田跡

調査区全域で、南北方向の畦畔3本、東西方向の畦畔5本からなる水田跡8枚を検出した。水田面の標高は102m前後で、西から東に向かって緩やかに傾斜している。南北方向の傾斜は調査区内では明確ではないが、周辺の現況地形から、北から南に向かって傾斜していたものと考えられる。

SJ1は幅78cm、高さ10cm、ほぼ座標南北方向の畦畔である。調査区中央付近に、土坑状の窪みを有する水口が1ヶ所設けられていた。また調査区北壁と接する部分で、長さ26cm、幅15cm程の白色軽石1個が埋設されていた。SJ1は、規模が最も大きくほぼ南北方向に構築されていること、畦畔の西側にSD1を伴うことから、いわゆる大畦畔であると思われる。

SJ2は幅20cm、高さ6cm、方向N-85°-Wの畦畔である。東西両端が残存していないが、東端は水口である可能性もある。SJ3は幅36cm、高さ1~2cmの湾曲した畦畔であるが、痕跡程度しか遺存しておらず、休耕田であった可能性もある。SJ4は幅54cm、高さ10cm、方向N-84°-Wの畦畔である。SJ1の手前で南に90°屈曲し、SD1を形成している。SJ5は幅36cm、高さ5cm、方向N-6°-Eの畦畔である。SJ6はSJ8との交点を境に北部と南部に分かれるが、同一畦畔として扱った。規模は幅48cm、高さ4cm、方向が北部N-3°-E、南部N-10°-Eの畦畔である。畦畔南部で水口が2ヶ所設けられていた。SJ7は幅45cm、高さ5cm、方向N-79°-Wの畦畔である。SJ8は幅48cm、高さ4cm、方向N-90°の

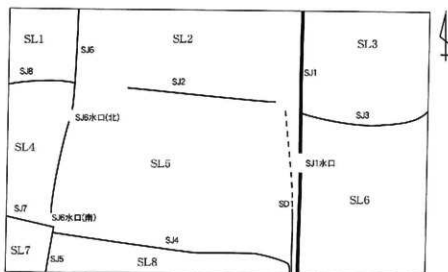




第4図 遺構配置図・土層断面図

● 人足跡

0 1/120 5m



畦畔である。

SD1は、SJ1の西側に沿って確認された浅い溝である。調査区南部では比較的に明瞭に遺構を確認することができたが、調査区中央付近から不明瞭になる。調査区内では明確な傾斜は捉えられなかったが、基本的にはSL2からSJ1水口やさらに南の水田へ配水するための施設と考えられる。

水田面には、人足跡と思われる楕円形の窪みや円形の窪みが無数に検出されたが、明確な歩行跡を抽出する事はできなかった。ただし、SJ3の南側で連続する足跡が確認されており、畦畔を意識して歩行しているように思われる。円形の窪みは区画によってその密度が異なり、SL3・SL5では密度が薄く、SL2・SL6では密度が濃い。また調査区中央北側では、馬蹄跡も数個検出された。その他SL5では、用途は不明だが、径5~6cm程度の杭跡を数ヶ所確認した。

2.ピット

SL5内で、3基のビットを検出した。Pit1は、SJ1とSJ2の交点付近で検出された円形のビットである。Pit2・3は、SL5中央付近で検出された円形のビットである。いずれも単独での検出であり、柱穴などとは考えられない。掘土の観察から、Pit1・2はⅤ層上面、Pit3はⅥ層上面の溝機である。

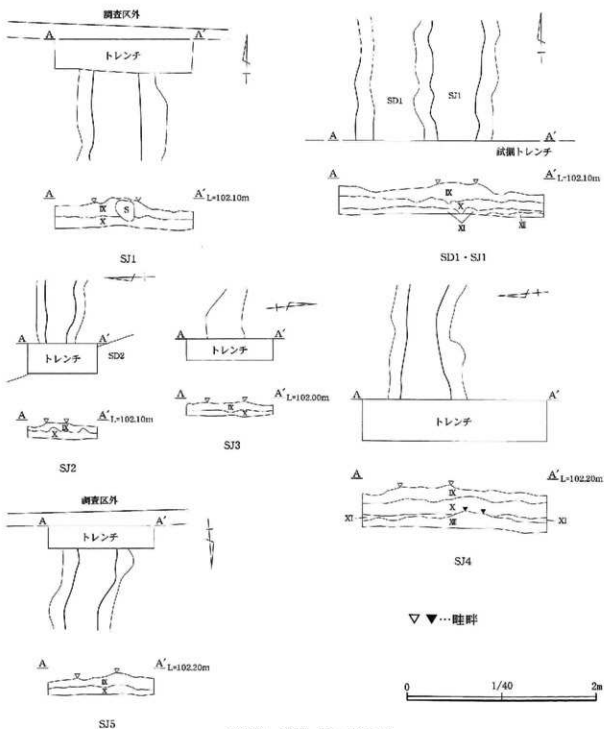
なおSJ4の屈曲部で、径35cm、深さ3cm程の円形の窪みが検出された。これは畦畔の屈曲部に位置することもあり、なんらかの人工物が設置されていた可能性が考えられる。

3.近世遺構

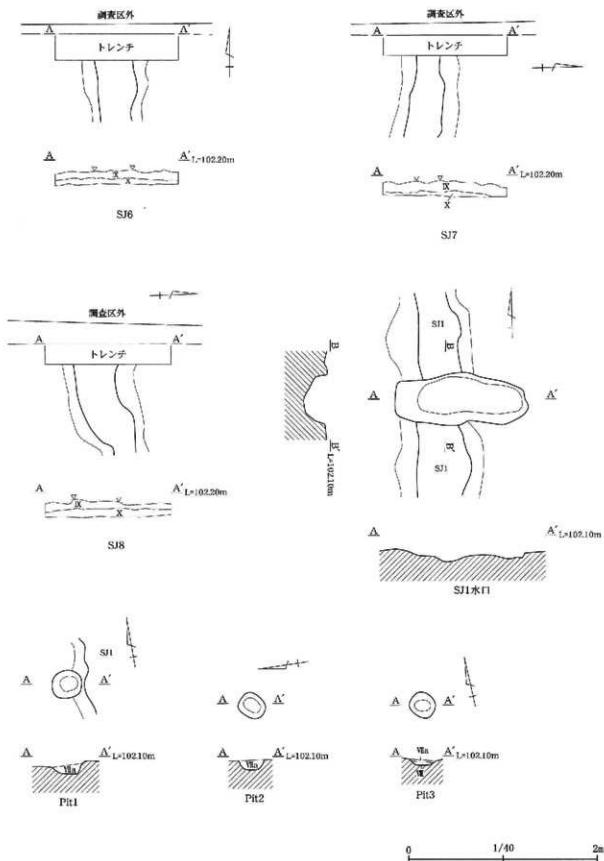
今回は期間等の関係で調査を行うことはできなかったが、近世の溝3条を確認した。いずれもⅢ層上面からの掘り込みである。SD2は未調査のため詳細は不明だが、幅2.3m、深さ1.6m程の、南北方向に延びるAs-A'復旧溝である。平面プランは緩やかに蛇行しており、SL2内で3m程土橋状に途切れている。SD3は幅40cm、深さ30cm、断面形状が箱形の溝である。SD4は幅64cm、深さ30cm、断面形状が緩いV字形を呈する溝である。SD3・4は、調査区南北端の土層断面のみでの確認である。3条の溝はいずれも土行方向が異なっており、新旧関係は不明である。

4.出土遺物

本遺跡からは19点の遺物が出土しているが、全て小片であり図示するには至らなかった。IV層からは土師器が2点出土し、内1点は赤彩が施されている。V層からは土師器が6点出土している。VI層からは土師器が8点出土している。X層からは須恵器が1点出土した。SD2からは、瀬戸・美濃産陶器の灰緑徳利と軟質陶器が1点ずつ出土した。



第6図 畦畔 平・断面図



第7図 畦畔・水口・ピット 平・断面図

VI.自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1.上並榎八反田遺跡の土層とテフラ

(1) はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるになっている。

そこで、層位や年代が不明な遺構や土層が検出された高崎市上並榎八反田遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、調査区北東部である。

(2) 土層層序

調査区北東部では、下位より暗灰色泥層(層厚4cm以上, XV層)、灰白色軽石に富む暗灰色砂質泥層(層厚5cm, XII層)、暗灰色泥層(層厚8cm, XIII層)、黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)、黒褐色泥層(層厚1cm, 以上XIV層)、黄白色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、桃色シルト層(層厚5cm, XI)、灰色シルト層(層厚10cm, X層)、暗灰色粘質土(層厚9cm, IX層)、成層したテフラ層(層厚15.7cm, VII層)、灰褐色砂質土(層厚0.5cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚1cm)、灰色砂質土(層厚6cm, 以上VIII層)、黄灰色砂質シルト層(層厚2cm)、砂混じり灰色土(層厚14cm, 以上VI層)、灰色土(層厚11cm, V層)、白色軽石を少量含む黄灰色土(層厚16cm, 軽石の最大径5mm, IV層)、白色軽石を多く含む黄灰色土(層厚6cm, 軽石の最大径6mm, III層)、白色軽石混じり灰褐色土(層厚14cm, 軽石の最大径6mm, II層)、盛土(層厚36cm, I層)が認められる(第8図)。

このうち、成層したテフラ層は、下位より灰色砂質細粒火山灰層(層厚0.3cm)、褐色軽石混じり黄色粗粒火山灰層(層厚0.4cm, 軽石の最大径16mm)、黄白色粗粒火山灰層(層厚1.5cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黄白色粗粒火山灰層(層厚2cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黄白色粗粒火山灰層(層厚4cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄白色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、成層した黄白色粗粒火山灰層(層厚1cm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚1cm)、桃色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)、白色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)からなる。発掘調査では、この成層したテフラ層の直下から水田遺構が検出されている。

(3) テフラ検出分析

分析試料と分析方法

テフラ層およびテフラの遺集層から採取された2試料を対象に、テフラ粒子の量や特徴を見るためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

分析結果

テフラ検出分析の結果を第2表に示す。テフラ検出分析の結果、試料2には、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径4.8mm)が多く含まれている。軽石の斑晶には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められる。またこの試料には、灰白色の軽石型ガラスも多く含まれている。一方、試料1には最大径2mmより大きい軽石やスコリアは認められないものの、斑晶に重鉱物として角閃石や斜方輝石をもつ白色の軽石型ガラス(最大径1.1mm)が比較的多く含まれている。

(4) 考察

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、試料2に含まれる軽石や火山ガラスは、その岩相や重鉱物の組み合わせなどから、4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると考えられる。層相やテフラの産状から、試料2(Ⅱ層)付近にその降灰層相があると考えられる。

また試料1が採取されたテフラ層(Ⅱ層下部)は、層相や火山ガラスの特徴、さらに含まれる重鉱物の組み合わせなどから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳渋川テフラ(Iir-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に同定される。その上位にある黄白色細粒火山灰層(層厚0.2cm, Ⅱ層下部)は、層相も合わせて考慮すると、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)の最上部の火山灰層(早田, 1993)に同定される。したがって、それを覆う桃色シルト層についてはHr-FPの噴火に伴って発生した火山泥流の堆積物(早田, 1989)と考えられる。

水田を覆う成層したテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。そのすぐ上位の青灰色細粒火山灰層(Ⅶ層下部)は、層位や層相などから、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間柏川テフラ(As-Kk, 1128年, 早田, 1991, 1995, 1996, 2004)に同定される。以上のことから、発掘調査で検出された水田の層位は、As-Bの直下にあると考えられる。

(5) 小結

上巻八反田遺跡において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間C軽石(4世紀初頭)、榛名ニツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間柏川テフラ(As-Kk, 1128年)のテフラ層やその降灰層を検出することができた。発掘調査により検出された水田遺構の層位は、As-Bの直下にあると考えられる。

文献

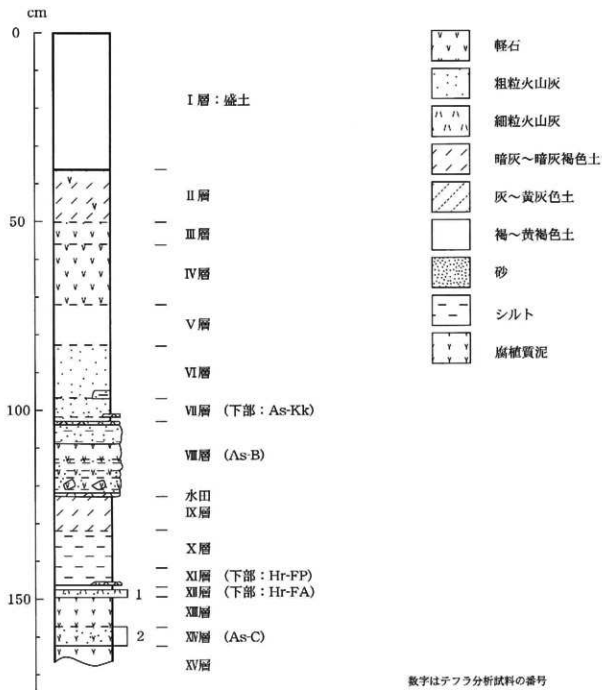
- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地団研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
- 坂口 一(1986)榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉(1993)古墳時代におこった榛名山ニツ岳の噴火。新井房夫編「火山灰考古学」。古今書院, p.128-150.
- 早田 勉(1995)テフラからさぐる浅間山の活動史。御代田町誌自然編, p.22-43.
- 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の活動史～とくに平安時代の噴火について～かみつけの里博物館編「1108～浅間山噴火～中世への胎動」, p.45-56.
- 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の榛名と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき。かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く～古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第2表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
調査区北東部	1	—	—	—	++	pm	白
	2	+++	灰白	4.8	+++	pm	灰白

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない, — : 認められない

最大径の単位は, mm, bw : バブル型, pm : 軽石型



第8図 調査区北東部の土層柱状図

2. 上並榎八反田遺跡におけるプラント・オパール分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である(杉山, 2000)。

(2) 試料

試料は、調査区北東部地点から採取された5点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

(3) 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-6}g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、タケ亜科(ネザサ節)は0.48である。

(4) 分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第3表および第9図に示した。写真図版PL.6に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

(5) 考察

水田跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000

個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

調査区北東部地点では、As-B直下のIX層(試料1)からAs-C直下のXV層(試料5)までの層準について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、IX層(試料1)とその下位のX層(試料2)では、密度が13,700個/gおよび12,300個/gとかなり高い値であり、Hr-FA直下のXII層(試料4)でも7,900個/gと高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Hr-FP直下層(試料3)とAs-C直下のXV層(試料5)では、密度が2,700~2,900個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、スキキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、イネ以外の分類群では各層準ともヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、各層準の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。なお、イネとヨシ属が共存していることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたこと、休閑期間中にヨシ属が繁茂していたこと、および施肥などの目的でヨシ属が水田内に持ち込まれたことなどが想定される。

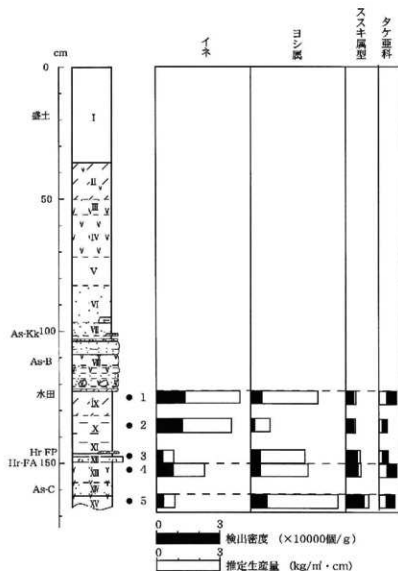
(6) まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下のIX層では、イネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-B下位のX層や榛名ニツ岳沢川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下のXII層でも、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、榛名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉中葉)直下層や浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)直下のXV層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。

各層準の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―、考古学と自然科学、17、p.73-85。



第9図 上並覆八反田遺跡、調査区北東部におけるプラント・オパール分析結果

第3表 上並覆八反田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		調査区北東部				
分類群	学名	1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i>	137	123	27	79	29
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	51	14	41	43	66
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	36	36	54	57	88
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	80	36	41	79	73

推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	4.04	3.61	0.80	2.32	0.86
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	3.19	0.91	2.57	2.71	4.16
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.45	0.45	0.67	0.71	1.09
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	0.38	0.17	0.20	0.38	0.35

VII.まとめ

本遺跡で検出された主な遺構は、As-B下水田跡1面と近世の溝である。

As-B下では、8本の畦畔に区画された、水田跡8枚を検出した。水田面は、北西から南東へ向かって傾斜しているとみられる。ほぼ南北に走るSJ1は、その他の畦畔に比べ規模が大きく、西側にSD1を伴っていることから、条里制に基づいて区画している大畦畔であると推測される。SJ1北端付近には、白色軽石が埋設されていた。畦畔に石を埋める事例は、上並榎下松遺跡や大八木水田遺跡などで確認されており、水口付近や畦畔の交点付近に石が埋設ないし設置される傾向がある。よって、SJ1の北壁付近に、水口もしくは東西畦畔が存在している可能性がある。

SD1はSJ1の西側に沿って確認された、南北に延びる緩やかな窪みである。周辺の地形などから考えて、SJ2東端の切れ目からSJ1水口、さらに南の水田に向かって水を流していた溝と考えられる。

水田跡で全体像が判明しているのはSL5で、平面形は北辺の短い、最大幅約23mの台形を呈している。「条里制水田」の1町(約109m=60歩)方格内の区画は、一辺を10等分する長地型と5等分する半折型が知られている。SL2・5・8は東西幅が21~23mの半折型であり、SL1・4・7も東西畦畔の軸が前述の水田と同じであることから、同様に半折型と推測される。一方SJ1の東側の区画は、南北畦畔が検出されていないため不明だが、SJ3が調査区東壁付近で北に向かって湾曲していること、また東壁に沿う形で水田面に若干の高まりがみられることから、SJ1の12m程東に南北方向の畦畔が存在している可能性も考えられる。以上のことから、SJ1の西側が半折型であるのに対し、東側は長地型である可能性が指摘できる。

次に周辺遺跡で検出されたAs-B下水田の様相も交えて、条里制地割りについて記述する。大八木水田遺跡は、一町四方に区画された「条里制水田」として知られ、そこで検出された大畦畔の交点座標(旧国家座標X=39,094、Y=-74,223、以下本章で用いる座標は全て旧国家座標とする)は、周辺の条里地割りを考える基準となっている。以下大八木水田遺跡を基準に、他遺跡を比較する。

飯塚大道東遺跡(X=38,102)や飯塚新田西Ⅱ遺跡(X=37,654)の東西方向の大畦畔は、一町約110m単位で考えると、各々9町南、13町南にあたり、同一条里にのると考えられている。本遺跡周辺では、上並榎下松遺跡の南北方向の大畦畔(Y=-75,212)や、上並榎御料所遺跡の南北方向の11号溝(Y=-75,327)が、一町約110m単位で考えると、各々9町西、10町西となり、同一条里にのるとみられる。本遺跡のSJ1(Y=-75,758)も同様にみると、14町西となり、同一条里にのると思われる。

以上、上並榎八反田遺跡は、As-B降下時には大八木水田遺跡などと同一条里にのる地割りの水田跡であったと推測でき、一町内の区画は、SJ1を基準に西側が半折型である。東側は長地型である可能性があり、本遺跡の東にある上並榎御料所遺跡や上並榎下松遺跡のAs-B下水田が長地型であることから、この可能性は高いと考えられる。

最後に、SJ4断ち割りトレンチ下位で確認された、幅18cm、高さ8cm程のⅢ層の高まりについて述べておく。前章において、今回プラント・オパール分析を行ったIX・X・XI・XII・Ⅳ層について、全ての層位において稲作が行われていた可能性が指摘された。Ⅲ層は、As-B下水田であるIX・X層に次いで数値が高く、よってトレンチ内で確認された土層の高まりは畦畔であった可能性が高い。このトレンチ内ではⅢ層が確認されず、Ⅲ層の高まりがHr-FA下水田であるか、Hr-FP下水田であるのかは不明である。上並榎御料所遺跡でも、Hr-FA・Hr-FP下位において水田跡が調査されており、本遺

跡Ⅱ層も6世紀代の水田跡であった可能性は否定できない。今後はHr-FA・Hr-FP下水田の存在も視野に入れて、調査を行っていく必要があろう。

参考文献

新井房夫編 『火山灰考古学』1993 古今書院

高崎市史編さん委員会 『新編 高崎市史 資料編1 原始古代Ⅰ』1999

高崎市史編さん委員会 『新編 高崎市史 資料編2 原始古代Ⅱ』2000

高崎市文化財調査報告書 第12集『大八木水田遺跡』1979 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第18集『御布呂遺跡』1980 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第78集『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告』1987 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第84集『並榎北遺跡』1988 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第90集『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告』1988 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第93集『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告』1989 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第108集『上並榎御料所遺跡』1990 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第110集『上並榎下松遺跡』1991 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第112集『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告』1991 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第120集『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告』1992 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第132集『岩鼻坂上北遺跡・八幡原灰塚Ⅱ遺跡・飯塚新田西・雁田遺跡・高崎市市内水田遺跡調査一覧』1994 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第144集『並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡』1996 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第155集『高崎市内遺跡分布地図』1998 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第170集『高崎市小規模発掘埋蔵文化財発掘調査概報4』2000 高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書 第186集『飯塚雁田Ⅱ遺跡』2004 高崎市教育委員会

高崎市遺跡調査会報告書 第38集『飯塚東金井Ⅱ遺跡』1993 高崎市教育委員会

高崎市遺跡調査会報告書 第43集『栄町Ⅰ遺跡発掘調査報告書』1996 高崎市遺跡調査会

高崎市遺跡調査会報告書 第54集『飯塚大道東遺跡』1996 高崎市遺跡調査会

高崎市遺跡調査会報告書 第65集『上並榎御料所Ⅱ遺跡』1997 高崎市遺跡調査会

高崎市遺跡調査会報告書 第69集『飯塚新田西Ⅱ遺跡』1998 高崎市遺跡調査会

高崎市遺跡調査会報告書 第83集『並榎町Ⅰ遺跡』2002 高崎市遺跡調査会

高崎市遺跡調査会報告書 第84集『沢尻旭貝戸遺跡』2002 高崎市遺跡調査会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第38集『上並榎南遺跡』1985 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第118集『融通寺遺跡』1991 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

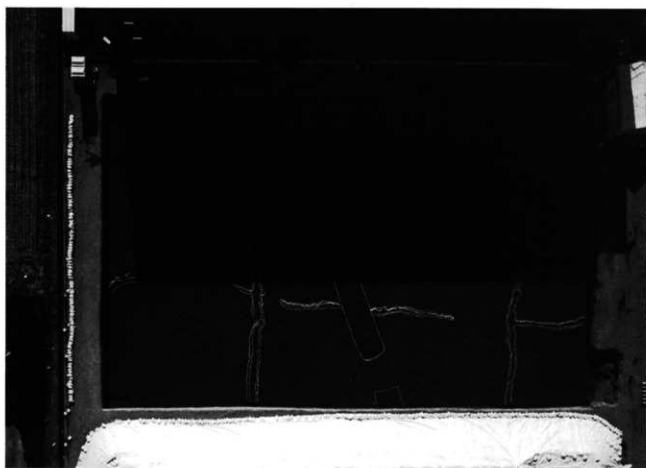
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第119集『下小島遺跡』1991 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第198集『大八木屋敷遺跡』1996 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

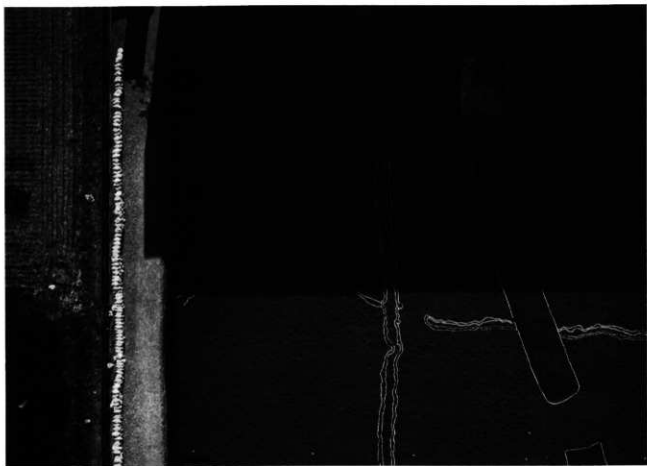
写 真 图 版



調査区 遠景（東から）



調査区 全景



調査区 東側



調査区 西側



SJ1 (南から)



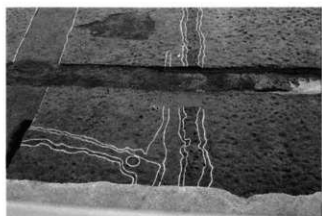
SJ1 水口 (東から)



SJ1 土層断面 (南から)



SJ3 (東から)



SD1 (南から)



SJ4 (東から)



SJ4 検出状況 (南東から)



SJ4 土層断面 (西から)



SJ4～7 (南から)



SJ6 (北から)



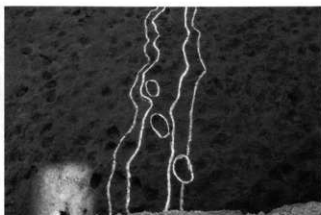
SJ6 水口 (北) (東から)



SJ6 水口 (南) (東から)



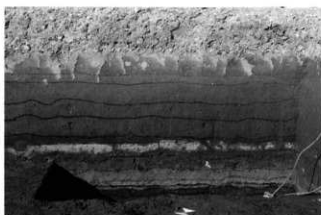
SJ4～7 (西から)



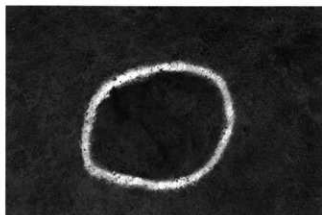
SJ7 人足跡付近 (西から)



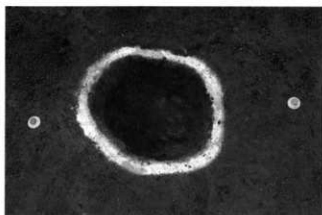
SJ8 (西から)



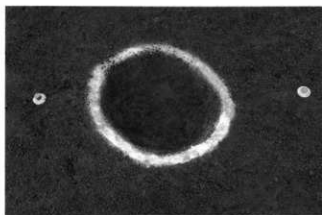
基本土層断面 (南から)



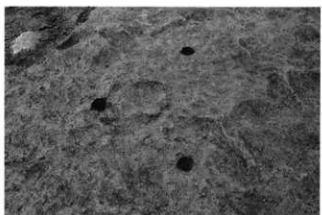
Pit1 (南から)



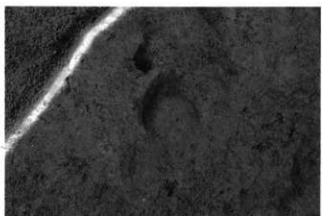
Pit2 (東から)



Pit3 (南から)



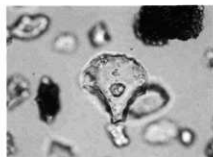
杭跡 (西から)



馬蹄跡 (南東から)



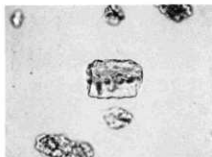
作業風景



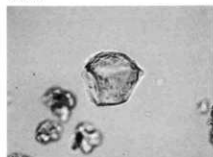
イネ
試料 2



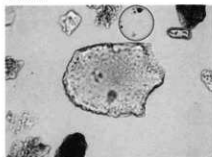
イネ
試料 2



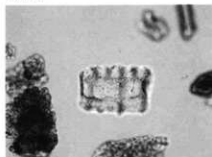
イネ (側面)
試料 3



ジュズダマ属
試料 4



ヨシ属
試料 1



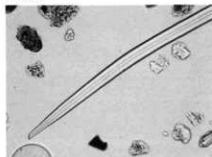
ネザサ節型
試料 3



ミヤコザサ節型
試料 3



棒状珪酸体
試料 1



海綿骨針
試料 2

50 μ m

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

報告書抄録

フリガナ	カミナミエハチタンダイセキ
書名	上笠櫃八反田遺跡
調査名	医療施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第198集
編著者名	斎藤寛方・菊池康一郎
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	2005年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
カミナミエハチタンダイセキ 上笠櫃八反田遺跡	群馬県高崎市上笠櫃町 〒370-8501 高松町35番地1 半八反田1187番地集	102024	385	36° 20' 50"	138° 59' 9"	2004.12.13 ～2005.1.6	1085㎡	医療施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上笠櫃八反田遺跡	生産地	平安時代	水田跡 1箇		
	その他		ピット 3基		
	その他	近世	溝 3条	陶器	

上並榎八反田遺跡

—医療施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成17年3月31日 印刷

平成17年3月31日 発行

編集・発行／高崎市教育委員会

高崎市高松町35番地1

TEL 027-321-1291

印刷／細谷印刷有限公司
